

パーキンソン病・不随意運動外来を始めました

神経内科医長 矢部 勇人



このように薬による治療のみでは、十分な改善が得られず、日常生活に支障を生じるような場合には、手術による治療も検討する必要があります。

パーキンソン病や本態性振戦、ジストニアに対する手術には、深部脳刺激療法 (DBS: deep brain stimulation) という手術があります。DBSは定位脳手術と呼ばれる古くから脳腫瘍などの治療に用いられてきた、脳内の特定の目標点に正確にアプローチする手技を応用したものです。パーキンソン病などの不随意運動は、視床や視床下核、淡蒼球といった脳の深部にある神経細胞において電気活動のバランスが崩れることによって起こると言われております。DBSでは、定位脳手術の手技により、この視床や視床下核、淡蒼球などの脳深部の目標点に電極を埋め込み、電気刺激を行うことで電気活動を調整します。

手術で病気そのものが治癒する訳ではありません。しかしながら、たとえばパーキンソン病では、薬の効果を肩代わりすることができ、薬の切れている時間が短くなります。薬の必要量を減らすこともできることも多く、薬の副作用を減らすこともできます。

これまで、松山市ではこの治療を行っている病院がありませんでした。このたび、当院では、神経内科と脳神経外科が連携し、「パーキンソン病・不随意運動外来」を開設することとなりました。お薬による治療も、手術による治療も、どちらか一方のみでは不十分です。当院では、これらの病気の患者様に対して、まずは飲み薬などで治療が十分にできるか検討させて頂き、可能であれば飲み薬の微調整を行います。お薬のみの治療では、効果が不十分な場合には、患者様の希望に合わせ、脳外科と相談させて頂き、手術の必要性について検討していきます。

パーキンソン病や不随意運動という症状でお困りの方は、是非一度、受診を検討してみてください。すこしでも症状改善のお手伝いをさせていただきます。



「不随意運動」という言葉はあまり聞き慣れない言葉かもしれませんが、随意運動というのは、自分の意思による体の動きのことです。つまり、不随意運動というのは、自分の意思に反して体が勝手に動いてしまう、という症状です。有名なものとして、パーキンソン病に見られる、手のふるえ(振戦)があります。その他にも、本態性振戦という、手や顔がふるえる病気や、ジストニアといって、身体の筋肉の一部が勝手に収縮し異常な姿勢をとってしまうような病気もあります。

これらの病気に対する治療の基本は薬物療法です。とくに、パーキンソン病に関しては、近年、飲み薬の種類も増え、治療法に幅が出てきました。病気の

初期の段階では、少量の薬でも十分に効果がありますが、病気の進行に伴い、次第に効果が不十分になってきたり、効果の持続時間が短くなったりします。このような状況

では、本来の薬の効き目を伸ばすための薬を併用したり、薬を飲むタイミングを変えたりと、細かな薬の調整が必要となってきます。パーキンソン病は神経内科で扱う代表的な病気です。細かな薬の調整は、一般的な内科などでは困難なことも多いため、パーキンソン病症状の進行等に困っている場合には、神経内科を受診して頂き、お薬を調節することが重要になります。

しかしながら、お薬の調整を十分に行っても、どうしてもふるえなどの症状が残ってしまう場合や、薬の効果が十分に持続しない場合があります。薬を使うことで、精神症状や、吐き気などの消化器症状、ジスキネジアという不随意運動などが出現し、十分な治療が行えない場合もあります。また、本態性振戦やジストニアなど、パーキンソン病以外の不随意運動を呈する病気では、有効な薬が少ないのが現状です。



その痛み、ふるえ、こわばりに困っていませんか? 当院で治療できます!!

機能的脳神経外科チーム

機能的脳神経外科という診療分野を聞いたことがありますか? 脳卒中や脊髄の障害の後におこる「筋肉のこわばり」や「そのこわばりからくる体の痛み」、パーキンソン病による「歩きにくさ」や「ふるえ」などの症状軽減を目的に、脳や脊髄・末梢神経に対して外科的処置を加えて、症状を改善させる診療分野です。「痛み」や「ふるえ」で悩んでいる方は、大変多いのですが、何科を受診したらいいのかわからないのではないのでしょうか。当院では、脳神経外科の田中寿知医師、神経内科の矢部勇人医師を中心に理学療法士・作業療法士・看護師がチームとなり、3年前より機能的脳神経外科の診療に取り組んでいます。今回は、当院で行っている①ITB療法(髄腔内パクロフェン投与療法)②SCS療法(脊髄電気刺激療法)③DBS療法(脳深部刺激療法)についてご紹介します。

①ITB療法(髄腔内パクロフェン投与療法)

脳卒中や脊髄損傷などの中枢神経の障害の後には「痙縮」という症状が筋肉に現れます。痙縮は脳や脊髄の異常により『筋肉を縮ませる命令』が強くなり、自分の意思とは無関係に筋肉が縮んでしまう症状のことをいいます。痙縮があると、着替えが行いにくい、食事が思うようにできない、よく眠れない、体にしめつけ感や痛みがある、思うようにリハビリテーションが行えない、などの症状が現れます。この症状を和らげる手術がITB療法です。筋肉を縮ませる命令を出している脊髄の神経に直接「パクロフェン」というお薬を投与し、筋肉を和らげることができま。脳卒中を発症してから数年たった方でも、いままで痙縮がじゃまをしてできなかったリハビリテーションが行えるようになり、さらなる動きの回復を得ることができる場合もあります。

②SCS療法(脊髄電気刺激療法)

痛みは誰しも苦痛なものです。痛みの感じ方も人それぞれであり、痛みがあっても「どうにもならないだろう…」と、痛み止め薬や湿布薬で我慢しながら日常生活を送られている方もたくさんいらっしゃるのではないのでしょうか。たとえば、手術で原因は治療されたはずなのに、痛みが良くならない、手術の適応がなく、痛みの緩和が難しい、薬の副作用が強すぎるので、なるべく薬を減らしたい、神経ブロックの効果が一過性で長続きしない、痛みが強すぎてリハビリ治療に支障がでている。これらの場合に、



脊髄電気刺激療法は有効な治療手段となります。当院で治療を受けられた患者さまで、痛みのためにほぼ寝たきり状態であった方が、大好きな歌手のコンサートに大阪まで行くなど劇的な改善を得ることができました。大げさかもしれませんがその方の回復をみて「その後の人生を変えることができる」治療法であると感じています。

③DBS療法(脳深部刺激療法)

パーキンソン病という病気をご存知でしょうか? 病気の名前は知っていても、その症状までは知らないことが多いと思います。パーキンソン病は、脳が出す運動の指令が筋肉にうまく伝わらず、なめらかな動作ができなくなってしまう病気で、これは、脳の黒質という部分の神経細胞が減ってしまうのが原因と言われています。最近歩きにくくなってきた、転倒しやすくなった、手足が震えることが多い、背中が丸くなってきた、声が小さくなってきたなどの症状はありませんか? これらの症状は一般的にお薬で抑えることができますが、その効果時間が限られていたり、副作用に悩まされている方に脳深部刺激療法は適応となります。この治療は、脳内のふるえを起こす原因部位に小さな電極を植え込み、パルス発生装置と言われる機械で刺激を行い、パーキンソン病の諸症状を緩和する治療です。

このように、済生会松山病院機能的脳神経外科チームでは、医師・理学療法士・作業療法士・看護師がチームとなり、外来から手術、そしてリハビリまで一貫して携わっています。この一連の流れが機能的脳神経外科の治療では重要となってきます。現在は、東予・中予・南予地域の先生方と連携して、患者様の身体の状態を正確に把握・診断させていただいています。そして、症状にあった治療により身体の機能を回復・向上させ、皆様の人生がより豊かで、素晴らしいものになるお手伝いをさせていただければと考えています。お気軽にご相談ください!

